

聴覚障害児に課した読書力検査と性格 特性の関係について

小村 欣司・大石富美代

Relation of Language Ability and Personality Quality with Deaf Children

Kinji KOMURA* and Fumiyo OISHI**

Summary

This study was investigated on the basis of the idea that the reading ability of deaf children was related to some sides of their personality. We imposed the Diagnostic Personality Inventory for the Handicapped, and the New Standard Reading Ability Test on 38 deaf children.

The following was found as results of this inquiry

(1) The two personality quality, the Independency and the Hyper-Activity were recognized positive interrelation with the results of Reading Ability Test.

(2) Significant differences were found when mean values of the Hyper-Activity scores of high rank group and low rank group were compared in the comprehensive faculty of writings, the grammatical faculty, and the reading faculty of letters. And significant differences were found when mean values of the Independency scores of high rank group and low rank group were compared in the comprehensive faculty of writings, the grammatical faculty, and the reading faculty of letters.

(3) The degrees of hearing loss with deaf children did not have directly influence on the marks obtained by the Reading Ability Test.

I 目 的

小学校も3・4年生頃になると、学力に停滞状態を示す者が目立ってくる。発達心理学では、この時期が質的転換期と考えられ、一般に学習につまずきの多い節目となっている。聾教育界で通常9歳の壁といわれてきた時期である。

学力の伸び悩みは、言語力と切り離すことはできない。特に聴覚障害児では書きことばに関する言語力が問われているが、読みの能力においても、小学校3・4年段階で停滞している¹⁾。幼少時代より、本人はもとより親も教師も言語学習面で、とうてい健聴児の経験しえないほど多大な努力を強いられてきたにも拘らず、やがてこの壁に突きあたる。聾学校小学部3年生で健聴4歳児群のレベル、小学部6年生で健聴4歳児より有意によいが

* 特殊教育教室 (Dept. of Special Education)

** 徳山市立徳山小学校 (Tokuyama Primary School)

5・6歳児レベルには至らない語力であり⁴⁾、語い量が少ないばかりでなく、内容的ひずみや語い定着の構造に問題がある⁶⁾という指摘をも受けるような言語能力で迎えた9歳から10歳の時期は、Piaget, J. のいう具体的思考から抽象的思考への質的変換期に当たっており、特に聴覚障害児では、抽象的思考の困難さによって言語能力の向上が阻まれている。

聴覚障害児の抽象的思考の発達が遅延する理由として、様々あるが、その一つに村井²⁾は、柔軟性を失った貧困なパーソナリティをあげ、聴覚障害児に対する指導のあり方を問題にしている。これは聞こえの障害による直接の影響というよりは、聴覚障害児として育てられてきた生活史全体から受ける影響の恐ろしさを示唆するものである。聴覚障害児への接し方が問われるゆえんである。真に望ましい係わり方は、育てられてきた生活史をひもとくことによって知りうる。

そこで、9歳の壁も単に、知的な発達の問題にとどまらず、性格の発達と相互に関連した問題としてとらえなければならない。聴覚障害児に形成された性格と読書力との関連を検討した研究はみあたらない。性格との関連から聴覚障害児にみられる言語能力の低迷状態が改善される手掛りとして。

II 方 法

精神薄弱や肢体不自由などの障害をもつ児童・生徒を対象に、担任教師や児童指導員が児童・生徒の行動を観察して性格を診断する他者評定法として作成された橋本・松原著心身障害児童生徒性格診断検査（以下性格診断検査とする）および読書力の検査として、教研式全国標準新読書力検査形式小学校高学年用（以下読書力検査とする）を用いた。

性格診断検査および読書力検査の処理は、いずれも手引書に従い、読書力検査は6学年用評価基準値を用いた。

III 調査対象及び調査手続

調査対象

Y市立聾学校中学部生徒を被調査対象とし、その内訳はTable 1に示した。

Table 1 被験児の構成

学 年	男	女	合 計
1	3	2	5
2	13	4	17
3	9	7	16
合 計	25	13	38
平均聴力損失範囲		89.7 dB~97.1 dB	
知能指数の範囲		85~105	

調査手続

性格診断検査は学級担任に評価を依頼した。読書力検査は、教室において集団的に実施

した。なお、聴力損失値は、1981年9月に聾学校において測定したものである。
調査期間は、1982年1月であった。

IV 結 果

1. 読書力と性格

1) 読書力検査得点上位群, 下位群における性格診断検査結果

読書力検査得点の上位10名(得点範囲: 68~89点)と下位10名(得点範囲: 21~41点)を抽出して、性格特性14項目についてそれぞれ得点の平均を求め、u検定の結果、有意性の認められたものは、活動過多性 ($u=18, n_1=10, n_2=10, P<0.01$) と自主性 ($u=24.5, n_1=10, n_2=10, P<0.05$) で、ともに読書力検査得点の上位群が下位群より高得点であった。

Table 2 読書力検査得点上下位群における性格診断検査得点の平均

	一般的活動性	生活習慣	自主性	根気強さ	指導性	社会性	情緒・安定	自己中心性
上位群	12.7	12	15.5	13	8.1	12.4	16.2	11.4
下位群	8.6	12.5	11.6	10.2	6.8	13.9	13.4	12.1
Uの値	30	49	24.5	35.5	42.5	47	36	48
P	ns	ns	<0.05	ns	ns	ns	ns	ns

	顕示性	固執性	活動過多性	神経質	劣等感	未熟さ	総点
上位群	16.7	14.5	19.8	16.3	14.8	19.1	202.4
下位群	13.7	13.6	12.9	16	15.5	17.2	179
Uの値	37.5	40.5	18	43	44.5	35	35.5
P	ns	ns	<0.01	ns	ns	ns	ns

2) 読書力検査得点と活動過多性および自主性得点

活動過多性と自主性の得点において、読書力検査得点の上位群が下位群より有意に高かった。そこで、38の標本すべてについて、活動過多性または自主性と読書力検査得点についてスピアマンの相関係数を求めた結果、両特性はともに読書力検査得点との間に正の相関が、そしてu検定で有意差が認められた。

Table 3 読書力得点と活動過多性及び自主性得点との相関

	活動過多性	自主性
n	38	38
r _s	0.50	0.39
P	<0.01	<0.01

3) 読書力検査下位項目と活動過多性および自主性

読書力検査の下位4項目それぞれに関して、高得点者と低得点者をTable 4の註に示す各群の得点範囲で抽出し、その者の活動過多性得点の平均点と自主性得点の平均点を求めたのがTable 4とTable 5である。抽出した人数は、各群を得点範囲によって抽出したため10~12人となった。平均点はいずれも読書力得点上位群が下位群を上回っていたが、

u 検定の結果、活動過多性については、読字力得点上位群と下位群間 ($u=33$, $n_1=11$, $n_2=11$, $P<0.05$), 文法力得点上位群と下位群間 ($u=19.5$, $n_1=12$, $n_2=10$, $P<0.01$), および読解・鑑賞力得点上位群と下位群間 ($u=18$, $n_1=10$, $n_2=10$, $P<0.01$) において有意差が認められた。

Table 4 読書力検査下位テスト別の得点上下位群における活動過多性の得点の平均

	読字力	語い力	文法力	読解鑑賞力
上位群の平均点	18.9	18.4	19.8	19.8
下位群の平均点	14.8	14.3	14.1	16.0
U の 値	33	36.5	19.5	18
P	<0.05	ns	<0.01	<0.01

(註) 1) 各群の得点範囲 (点)

	読字力	語い力	文法力	読解・鑑賞力
上位群	36~41	12~20	8~14	14~23
下位群	1~24	4~6	0~2	3~7

2) 各群の人数 (人)

	読字力	語い力	文法力	読解・鑑賞力
上位群	11	12	11	10
下位群	11	10	12	10

Table 5 読書力検査下位テスト別の得点上下位群における自主性の得点の平均

	読字力	語い力	文法力	読解鑑賞力
上位群の平均点	15.3	15.1	15.5	16.8
下位群の平均点	11.3	13.5	11.4	12.6
U の 値	32	44.5	32.5	19
P	<0.05	ns	<0.05	<0.01

(註) Table 4 の (註) に同じ

自主性については、読字力得点上位群と下位群間 ($u=32$, $n_1=11$, $n_2=11$, $P<0.05$), 文法力得点上位群と下位群間 ($u=32.5$, $n_1=11$, $n_2=12$, $P<0.05$) および読解・鑑賞力得点上位群と下位群間 ($u=19$, $n_1=10$, $n_2=10$, $P<0.01$) において有意差が認められた。

2. 読書力と聴力

1) 左右平均聴力損失値と読書力

左右の平均聴力損失値の大きい群（平均聴力損失の範囲：101～115dB）とその小さい群（平均聴力損失の範囲：67～85dB）において10名づつ読書力検査得点の平均値を求めたのがTable 6である。聴力損失の大きい群が小さい群より読書力の平均得点は高かったが、u検定の結果有意差は認められなかった。なお、両群間の聴力損失値の差は、1%の有意差があった。

Table 6 左右の聴力損失平均値の大きい群と小さい群における読書力検査得点の平均

	読書力検査得点の平均	聴力損失値の平均 (dB)	聴力損失値の範囲 (dB)	被験児数
聴力損失の大きい群	53.6	104.5	101～115	10
聴力損失の小さい群	51.8	80.2	67～85	10
U の 値	47.5	0		
P	ns	<0.01		

2) 良耳聴力損失値と読書力

良耳のみを尺度に聴力損失値の大きい群（聴力損失の範囲：96～113dB）と小さい群（聴力損失の範囲：64～81dB）について、読書力検査得点の平均値を求めたものがTable 7である。聴力損失の小さい群が大きい群より読書力の平均得点は高かったが、u検定の結果有意差は認められなかった。なお、両群間における聴力損失値の差は1%の有意差があった。

Table 7 良耳の聴力損失の値が大きい群と小さい群における読書力検査得点の平均

	読書力検査得点の平均	聴力損失値の平均 (dB)	聴力損失値の範囲 (dB)	被験児数
聴力損失の大きい群	51.7	101.9	96～113	10
聴力損失の小さい群	52.7	76.6	64～81	12
U の 値	59	23		
P	ns	<0.01		

V 考 察

従来、障害のなかでも聴力の障害は、言語障害を阻害する最大の要因の一つと考えられてきたため、聴覚障害児の言語に自然な発達はなく⁵⁾⁶⁾、その発達には訓練や教育の方法が大きく関与している⁷⁾と考えられてきた。当然、言語力は聴力欠損状態と関係することになるが、本研究では、聴力損失の程度が直接読書力検査得点を左右しない結果が得られた。聴力の欠損が言語力の発達を決定的に阻む要因でないことになる。臨床的に、軽度の聴力損失でありながら、言語力の乏しい者がいたり、高度の言語力を身につけた者が重い聴力障害であったりする経験からも理解できる。そこで、言語力に影響を及ぼす要因が他

にあり、その一つとして性格や性格形成に関与した諸々の環境因があるものとの見地から、聾児のなかで、読書力上位群と下位群にみられる性格特性についての関連性を検討した結果、14項目からなる性格特性のうち、活動過多性と自主性との関連が見出された。また、統計的には認められなかったが、両者の関連性を否定しえないと思われる項目にU検定値から、一般的活動性、根気強さ、未熟さがある。

本検査において、読書力上位群は活動過多性得点が高かったがこれは、光や音などの感覚刺激に反応したり注意がそらされるような感覚性の活動が少ない者や、注意をひいた事物や対象をいじくったりする運動性の活動が少ない者たちであったということである。心身共に落ち着いていた場合に活動過多性得点が高かったことになる。

活動過多性得点は、読書力検査の下位項目のうち、読解・鑑賞力及び文法力の上位群で下位群に対し1%水準の差があるが、読書力の中でも読解・鑑賞力や文法力とより深いかわりがあり、その理由は更に検討されなければならない課題である。

自主性得点が高い者は、人に頼らず独力で行動したり、自分で判断し確固とした自分の意見をもてるもので、このような聴覚障害児が読書力が高かったものである。聴覚障害児において活動性及び自主性という性格特性と読書力との間に正の相関が認められたが、これらの性格特性はすべての学習において重要な要素と思われる。特に自主性について、みずから考える機会を失い、受身的な生活を余儀なくされていたり、依存的な性格による他者とのかわり方では、もてる学習能力を十分に発揮することはできない²⁾³⁾。常に高次の知識を付与し、高次の行動のみを強化しようとする指導が行われる場合には、大きな危険をはらんでいることに留意しなければならない。

能力の高揚は、自主性を尊重するかかわり方にある。「自己選択の機会がなく、他者の指示や評価によって行動が規制される環境の中では、内発的興味・向上心・効力感などが低下して無力感に陥ってしまう²⁾」のである。課題やそれに対する評価を一方的に与えるのではなく、できる限り、子供自身がみずから選んだ選択基準や評価基準に従うようにすることであるといえる。自ら選択した基準が満たされたとき、内的必然性から次の発達段階へ前進するものである。

VI 要 約

聴覚障害児の言語力が性格のある側面と関連するものと考え、38名の聾児に、心身障害児童生徒性格診断検査と教研式全国標準新読書力検査を課した。

調査の結果、次のようなことが見出された。

(1) 一般的活動性、生活習慣、自主性、根気強さ、指導性、社会性、情緒安定、自己中心性、顕示性、固執性、活動過多性、神経質、劣等感および未熟さの14下位項目からなる性格診断検査において、読書力検査の結果と正の相関が認められた性格特性は、自主性と活動過多性とであった。

(2) 読書力検査の下位項目それぞれの上位群が得た自主性得点の平均値と活動過多性得点の平均値はいずれも下位群より高得点であった。そして、読書力テストの下位項目であ

る文法力及び読解・鑑賞力の上位群が得た活動過多性得点の平均値は、下位群が占めた活動過多性得点の平均値に対して1%水準で、語字力では、5%水準で有意であった。読解・鑑賞力の上位群が占めた自主性得点の平均値は、下位群が占めた自主性の平均値に対して1%水準で、文法力・読字力ではともに5%水準で有意であった。語い力については、活動過多性も自主性も有意差がなかった。

(3) 聴力損失の大きい群と小さい群とで、読書力検査の得点に有意差は認められなかった。

(付 記)

本論文を作成するにあたり、調査にご協力下さったY聾学校の校長先生はじめ、諸先生および生徒の皆さんに深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 井原栄二他：聴覚障害児の語い・読み・作文指導，明治図書，106-120，1982.
- 2) 村井潤一他：ろう児の概括化に関する研究(1)ろう教育科学，10，1-21，1968.
- 3) 波多野誼余夫他：無気力の心理学，中公新書，51-72，1981.
- 4) 中西靖子他：絵一単語合わせ語い検査による聾学校児童の語い力，聴覚言語障害，9，71-76，1980.
- 5) 安野友博他：難聴児の言語発達，耳鼻臨床，58，344-347，1965.
- 6) 荒山 喬他：感音性難聴児の言語発達について，耳喉，42，107-115，1970.
- 7) 大和田健次郎：難聴児の補聴・訓練，岩崎学術出版社，1978.
- 8) 中野善達：聴覚障害幼児の性格特性，ろう教育科学，14，119-133，1972.